役者の戦死

峰尾静彦

役者の戦死

峰尾静彦

講談社

峰尾静彦（みねお・しずひこ）
1917年（大正6年）生まれ。海軍兵学校卒。海軍少尉、累進し少佐。終戦後、フィリピンで戦犯容疑をかけられたが無罪となり、1953年（昭和28年）帰国。ニッポン放送報道部、フジテレビスポーツ部長を経て、1962年（昭和37年）退職。東邦大学付属中・高校「習志館長」となる。現在、㈱トーメン勤務。著書に『海鳴りが聞こえる』がある。

役者の戦死

定価一二〇〇円

昭和61年4月10日　第1刷発行

著　者　峰尾静彦
装　幀　オフィスR
発行者　野間惟道
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二丁目一二一-二一
郵便番号　一一二
電話　東京(03)九四五—一一一一（大代表）
印刷所　双美印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

© 峰尾静彦　一九八六年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-202760-7 (0)（学2）

役者の戦死／目次

プロローグ 5
血液検査 6
宣告 10
閉館 14

入院 19
同居人 20
順応 26
父と黒酢 34
母堂と夫人 41
特別の計らい 47
外泊許可 52
見舞い 55

小康 61
早朝の仕事 62
男の生き甲斐 69
いきつけの店 72
女の直感 77
後ろ肩 82

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

悪化 85
涙と笑顔 86
特攻隊 92
見舞客 98
生死の問題 106
憤死を予感 111
首実検 116
死に様 123
急変 131
メモ 132
厳戒態勢 137
大芝居 141
壮絶な治療 145
危篤 153
絶望の影 154
星くず 158
年賀状 164
作り笑い 169

待機部隊 174
女丈夫に変身 179

死去 185

複数の影 186
駆ける足音 189
影の静止 194
戦死の二文字 197

エピローグ 203

万感の呟き 204
情愛 209
周りの人々 214
安心切符 217

あとがき 224

プロローグ

血液検査

昭和五十九年十一月二十四日（土）

「この症状は、オレの手に負えないなあ、ミネさん」

ミネさんとは私のことで、親しい仲間はこう呼んでくれる。ドクター三浦は私と中学生以来の友人で、彼は医学の道に、私は海軍兵学校に進んだが、友情はいまも変わらず、もう五十年あまり付き合っている。

お互い、やがて七十歳に手が届く老境に達しているが、とくに親しい間柄だから、彼は私を「ミネさん」と呼ぶ。私は彼を、場合によっては「先生」とか「ドクター」と尊称をささげるが、ときにはふざけて「ヤブ」などと、ひやかすこともある。

彼は目黒区の医師会会長を務めたり、ロータリー・クラブのメンバーだったりで、けっこう人望はあるようだが、医者としての腕のほうは果たしてどうなのであろうか。

土曜日ごとに私は彼の検診を受ける。いつも相当混雑しているから待たされることが多い。患者が詰めかけるのはドクター三浦の腕のよい証拠かもしれない。もう十数年もつづいている

検診だから、私は落ち着いて待っている。

私の検診は血圧測定が主体だが、身体のことについてはなにごとによらず彼に面倒をみさせるのが、私の習慣になっている。

私の勤め先は私立高校の特訓道場で、週一度、土曜日に帰宅する。そのたびごとに検診を受けるわけだ。

だから病気ゆえの診察ではなく、健康維持のための検査というほうがわかりやすい。

やっと私の順番になると、会田看護婦が「峰尾さん」と呼ぶ。私はことさら大きな声で「ハーイ」と答える。会田看護婦はこの返事を聞くのが楽しみで、「ああ、土曜日なんだ」と思いつくそうだ。

診察室に入ると、ドクター三浦は医者の顔から友人の顔に変わる。忙中閑を求め、ホッとするのであろう。眼鏡越しの眼が少年時代と同じように、優しく笑いかけているのだ。

だが、今日は違う。厳しい眼つきだ。

「貧血がさっぱりよくなってないよ」

先週の血液検査のデータをにらんで、真剣な表情だ。

「これは、なにかほかの病気かもしれない。増血剤の効果もまったくないしなあ」

半年前、老年者の健康診断で、念のため血液検査をした。その結果、多少貧血ぎみとわかっ

たので、増血剤の服用をはじめた。以来、一ヵ月おきに血液検査をつづけ、今回は五回目にあたっていた。

「むしろ、貧血はひどくなっている」

ドクター三浦は決断するようにいった。

「ともかく、国立東京第二病院で検査してもらおう。あそこには、血液に関して大家といわれる伊藤先生がいる」

返事も聞かずに、彼はドクター伊藤あての紹介状をしたためた。

「まだ受付時間にまにあうだろう。オレからも電話するから、すぐ駆けつけてくれ」

彼の顔は真剣そのものなのだ。いつもなら、私と会えばひとときは喜々と楽しむ。それが有無をいわさず、私をせきたてる。

私は、愛車レオーネを飛ばした。受付窓口にたどり着いたのは、締め切りギリギリの十一時ちょうどだった。

ドクター三浦がどんなに騒いでも、検査を受けろといわれた当の私はきわめて楽天的で、どうせたいしたことはない、ドクター三浦の思い過ごしと、たかをくくっていた。

貧血症といわれても、体力の充実感はあるし、自覚症状らしいものはまったくない。暑い季節は水泳を、涼しくなればジョギングを楽しむ元気さを自慢しているぐらいなのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

受付窓口には連絡があったとみえ、快く応対してくれた。

しかし、大病院というところは、患者をよくも平気で待たせるものだ。正午をはるかにまわったところで、看護婦がやっと私の名を呼んだ。その声は、きわめて事務的で愛想のかけらもありはしない。

診察室に入る。白髪豊かな信頼できそうな医者がいる。この人が血液の大家、ドクター伊藤であることは、すぐわかった。

「ともかく血液検査をやりましょう。その結果をみなくては、なんともいえませんよ」

ドクター三浦の添書を垣間見ながら、裸になった私の胸を二、三回たたいて、ドクター伊藤は簡単な診察を終えた。

——また血液検査か、採られる身にもなってみろ——。

正直いって、六ヵ月も血液検査をつづけたから、もううんざりなのだ。どこでやっても、検査は同じじゃないか、というこちらの言い分もあるのだ。

しかし、医者の命令には従わねばなるまい。それからまた一時間ほどかかって採血を終わり、金を払って、やっと病院をあとにした私はもう腹ぺこで、貧血症のためでなく、空腹で倒れるのではないかと思った。

宣告

十一月二十八日（水）

ドクター伊藤が、検査のデータを見て厳粛にいった。

「すぐ入院しなさい！」

私は一瞬、耳を疑った。なにかの聞き違えではないか。

「えっ！」

あとの言葉が出てこない。ドクター伊藤は、今度は確かめるようにいうのである。

「検査の結果はたいへん悪いですよ。放っておいたら危険です」

「自分ではぜんぜん、悪いと感じてないのですが……」

私のせめてもの反抗である。

「科学は厳正です。検査のデータは正直です。あなたは相当危険状態の病人です」

「いきなり入院といわれても、仕事の都合もあるし……」

「生命あっての仕事でしょ、どっちがたいせつか、おわかりにならぬお年でもありますまい」

「それはもう……」

「あなたは、自分の身体の状態を、だいぶ軽く考えておられるようだが、ポックリいかれる虞もあるんですよ。いまなら治ると思いますがね」

ドクター伊藤は厳しい眼つきで、キッパリ宣言するのだ。私は観念した。

「では、できるだけ早く仕事を片づけて、入院させていただきます。二、三日は余裕をください」

私は重い気持ちで愛車のハンドルを握った。こういうときは事故を起こしやすい。運転するときはなにも考えまい。そう自分にいい聞かせても、ドクター伊藤の言葉が気にかかる。

——ポックリいくかもしれぬ、といった。検査の結果を教えてもくれない。そして入院の宣告だ。もとはといえば貧血だ。貧血とポックリ、それはどんな関係があるのだ——。

車は駒沢通りを上って、環七・柿の木坂陸橋にさしかかっていた。右折してすぐ最初の角を左折すれば、わが家は近い。

——いまなら治ると思うがね。貧血とポックリ、貧血とポックリ——。

私は幾度も、ドクター伊藤の宣告を繰り返した。

突如、私の頭にひらめいたものがあった。

「あっ、ガンだ。血液ガンだ」

私は鋭く叫んでいた。同乗の人がいたら、驚くほどの叫び声だったろう。私は車を歩道に寄せてとめた。胸の動悸が激しかった。

そういえば、入院を二、三日延ばしてくれと頼んだとき、いますぐできる検査をしよう、といってドクター伊藤は、若い研修医を走らせた。

研修医がなにやら大がかりな道具を運びこむと、ドクター伊藤は、私を診察ベッドに寝かせて、胸を大きく開かせた。胸骨の真ん中をたたいて、ニコリともせず、私に告げた。

「ちょっと痛いですよ。がまん、がまん」

いいも終わらぬ早業で、太い針が骨に打ちこまれた。グブグブと体液が吸いとられるのがわかった。それは強烈に痛かった。

——あれは髄液を採ったのだ。ガンの疑いがあるから髄液を採ったに違いない。いや、私がガンにかかっていると確信しているから、やったのにきまっている——。

車を走らせれば、あと二分もかからずに、わが家に着く。私がこんな重病にかかっていると知ったら、妻は動転するだろう。知らせてはならない。知られてもいけない。

私は車をとめたまま、十分間ほど、どうすべきか考えていた。痛かった胸骨の針のあとを指でなぞってみた。押すとまだ痛かった。離すと気分が和らいだ。いつしか無念無想になり、動悸は静まっていった。

そうだ、ふだんのように振る舞うしかない。深刻な顔をしたり、悲しそうにしたら、私以上に数倍も妻は嘆くだろう。

エンジンにキーを入れた。車を静かに転がして、わが家にたどり着いた。平常と変わらぬ態度をとってはいても、心は鉛を呑むように、重く暗かった。

「あら、いいところに帰ってきたわ」

六十二歳にもなる妻が、年甲斐もなく、はしゃいでいる。検査の結果を聞くことなんか、忘れてしまっている。私の健康を信じているのだ。

「久仁子といっしょに、トンカツ屋でお昼を食べることにしたの。あなた、おごってくださるわね」

妻は一度いいだしたらあとに引かない。妻と娘は、さっさとしたくをして靴をつっかける。私は黙って二人のあとにつづいた。

彼らの明るい振る舞いのおかげで、私の胸の霧は消え失せた。救われた気分だ。私の足取りも軽かった。

近くのトンカツ屋「新海」の座敷に坐ったとき、ポツンと妻がいった。

「検査の結果はどうだったのよ？」

「うん、入院だってさ。もっと詳しく検査するんだそうだ」

ごくあたりまえの声で、淡々と話すことができた。
「来週のはじめには入院するつもりだ。当分酒もやめることになるな」
「そう、おかわいそう。それなら一本だけ、お飲みなさいよ。一本だけよ」
楽しい食事であった。私にとっては、救いの神の出現のように思われた。もやもやも晴れた。うれしい一家団らんであった。

閉館

十一月二十九日（木）
いやいやながら、私は入院を決意したが、特訓道場・習志館に預かっている生徒のことが、急に心配になった。
習志館の文字が示すように、私の勤める学校は、千葉県・習志野市に在って、県内では著名な私立校とされている。
宿泊訓練を希望する生徒は、多いときは百人を超えることもあったが、最近は十名ぐらいが限度で、寒さに向かうこの時期には、幸か不幸か、わずか二名の登校拒否症の生徒を預かって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com